

自立期にある大学生の生活教育観

○山崎古都子、寺岡一平（滋賀大）

目的：本研究は子ども世代と親世代の間にある大学生を対象に、これまでに受けてきた家事労働・生活教育と自分の自立形成の相関性及び、将来、子どもに対する生活教育観の形成との関連を明らかにするものである。調査は滋賀大学教育学部の1，2回生を対象に2000年10月に悉皆調査を行った。

結果及び考察：大学生が最も多くしている家事労働は自室の掃除である。女子の場合は下着の洗濯も多い。反対に少ないのが便所の掃除である。日頃の家事労働の差違は性別よりも居住形態別の方が大きい。自宅生の場合プライバシーに属するものを除くとあまり家事労働をしていない。親からは「ある程度まで」しか家事労働教育を受けておらず、「親と同レベル」までの教育を受けた自覚を持つ者は5%にすぎない。すなわち生活能力は親から子への伝承の形を取っていない。大学生は比較的自己の性格をプラスに評価している。性格の自己評価は家事労働の従事状況と高い相関が見られた。大学生は自己が受けた親の生活教育態度は比較的甘いと評価している。親が家事労働教育に積極的であるほど大学生は自己の性格をプラス評価し、自己評価が高い学生の自立意識は高い。親の生活教育態度はこれら大学生の人間性形成と強い相関を示した。大学生が将来親になった場合の子どもへの家事労働教育観は、自分が受けたと自覚よりも積極的な意識を示した。親からの教育が低かったとと思っている回答者ほど積極的傾向がある。